

高校1年生

曾 我 雄 司・渡 辺 絵 美・佐 藤 健 太
中 川 真 梨 子・杉 本 雅 子・市 川 哲 也

(1) 年間の学習目標

- ・個人研究を進めていくための基礎的な調査方法を身につける
- ・PBL (Problem Based Learning) を通じて、学んだ調査法の使い方について実体験する。
- ・SGHの6領域を念頭に置きつつ、個人テーマについて模索する

現在の総合人間科プログラムでは、2年生から個人研究の探求を行うが、そのために基礎的な調査方法を講義・実践を通じて身に付けること、各人の興味関心から出発して個人研究のテーマを見つけることが、1年生の学習の目的とするところである。前者については授業の時間で、後者については講義での学習を踏まえうえて長期休みのレポート作成などを課した。

(2) 実施方法

今年度はコロナによる休校が4・5月とあったため、その期間についてはオンラインでpdfの教材を配布し、そのワークを提出してもらう形で学習を進めた。その後、クラス単位での研究方法のガイダンスを行った。後期は20人前後のグループに分かれ、PBLの中でこれまで学んだ方法を集中的に実践することとした。探究の成果については、グループ内で発表会を行って共有し、A4一枚のレポートとして各自にまとめさせた。また夏季休業中に、個人テーマを考えるための課題に取り組ませた。

(3) 内容

1) 年間の授業展開

日・曜日・時	内 容
4月課題として	高校の総人について (ガイダンス) 研究の方法1 (自己の関心を「見える化」する)
5月課題として	研究の方法2 (探究活動の進め方/課題の設定) 研究の方法3 (課題分析/計画の立て方)
6月11日 (木)	研究の方法4 (記録法)
6月18日 (木)	研究の方法5 (資料の性格と文献調査)
7月9日 (木)	研究の方法6 (クリティカル・リーディング)
7月16日 (木)	PBL概論
夏休み	【課題】 レポート「個人テーマに関する新書のブックレポート」
8月27日 (木)	PBL①第一次問題解決
9月10日 (木)	PBL②第一次問題解決
9月17日 (木)	PBL③グループ内中間発表会
10月8日 (木)	研究の方法7 (アンケート・インタビュー) / PBL④第二次問題解決
10月29日 (木)	PBL⑤第二次問題解決
11月5日 (木)	PBL⑥第二次問題解決
11月19日 (木)	PBL⑦第二次問題解決
12月3日 (木)	PBL⑧第二次問題解決
1月14日 (木)	PBL⑨班での結果共有・発表準備
1月21日 (木)	PBL⑩研究成果発表会 (グループ内) / 振り返り
3月11日 (木)	来年度のテーマ決めとグループ分け

2) 研究方法の習得

前期を中心に、基本的にクラス単位として行った。先に述べたように、今年度はコロナによる休校期間にオンラインでpdfの教材を配布し、そのワークを提出してもらい形で学習を進めた。高校1年生の中には、高校から入学してくる生徒=これまでの附属学校の総人の流儀を全く知らない生徒もいるため、ついていけるか心配であったが、ほとんどの生徒が課題にしっかりと取り組み、提出することができていた。通常授業時間内で行うとレクチャーの時間でいっぱい、ワークによって生徒自身の実践を通じて身につけていく機会が取れないことが多いが、この形式だとじっくり取り組ませることができることが分かった。研究方法のレクチャーについては、課題提出の期限を設定した自学自習スタイルでもいけるのではないかと感じた。また一昨年・昨年と同様、アンケート・インタビューについては、文献調査を踏まえたうえで行ってほしいことから、第二次問題解決のタイミングでレクチャーを開始し、生徒にもレクチャー後にアンケート・インタビューは行うように指導した。

3) PBL (Problem Based Learning) ～研究方法の実践的習得～

今年度は9月から、PBLに入った。以前に担当した教員から、PBLの探究期間を長くとりたいとの要望があったためである（とはいっても、コロナによる授業時間・諸行事のずれ込みにより、意図した8月開始ができなかったうえでの9月である）。6人の教員が6つのテーマを用意し、各テーマ20人前後の生徒を希望に応じて割り当てた。各テーマ内では、3～5つの班に分れ、4～6人での課題探究学習を行わせた。今年度のテーマは以下の6つである。

テーマ	概要
起業年齢は経営成果に影響を与えるか	人生100年時代。フリーランスが日本においても増加傾向にあり、起業家教育にも注目が集まっている。そこで、起業をする年齢がその成果にどのような影響を及ぼすかを検証する。
ワクチンは、コロナウイルスによる感染拡大を防ぐために効果があるか？	ウイルスの感染経路や、感染予防、行政の指導などの観点から予防接種の意義と信頼性について考える。
音読は効果的な英語学習方法なのか。	"英語学習はリスニング、リーディング、スピーキング、ライティング、文法など多岐にわたり、どのような学習方法がいいのかは学習者のスキルにもよるので一概にはいえない。今回は学習方法の一つである音読が本当に効果があるのかを検証する。
聞き取りやすい音声表現とは	どのような音声表現が聞く人に伝わりやすいのか。文章、言葉、音声などの観点から、情報の発信者として心がけたいことを探る。
音楽がもたらす効果とは何か。	どんな音楽でも作業効率上がるのか、顕在的能力を発揮させたり潜在的能力を引き出したりする効果があるのか、医療の現場での音楽療法などを掘り下げて、幅広く音楽の効果について考えさせる。
どうすればホームルームはみんなにとって居心地の良い空間となるか？	生徒にとって、ホームルームは一日の生活の大半を過ごす場だが、この空間をどのように「設計」していくかについて、物理的な方法、人的な方法などいくつかあるアプローチを踏まえて、仮説を立てて検証する。

4) 個人テーマに関わる活動

4・5月のレクチャー・課題は、研究の進め方に関するものでありながら、同時に個人テーマに関わるものでもあった。4月課題ではマンガラート法を実践することで、自身の課題が見える化し、本校の設定する6つの研究領域とのつながり・親和性について考えさせた。5月課題では、ピリヤード法を実践することで、自分の関心を問いの形とさせることで、個人の関心の掘り下げを進めさせた。

夏のレポートでは、自分のテーマと関わりそうな新書を探してブックレポートを書かせた。研究の方法の習得という面では、7月に行ったクリティカル・リーディングの実践にあたる。新書一冊の全体像を把握したうえで、自分が注目したい部分について、全体の中での位置づけと、他の文献による内容の確認を行わせた。課題用紙はA4で6ページ強になるものであったが、多くの生徒がその全面をほぼ埋めて提出することができており、かつ疑問の実感・提示もできていた。

(4) 成果と課題

1) 成果（ルーブリックの活用について）

SGHプログラムの全体ルーブリックをもとにしながら、今年度は課題に応じた形の個別ルーブリックを作成した。4・5月のレクチャーに伴う課題、夏のレポート、PBLの発表および集録のそれぞれについて作成した。また課題の作成前に「B」基準を文章の形で生徒に示して目標を明確にすること、課題作成後に生徒にルーブリックを示して自己評価をさせること、その自己評価に対して教員の評価を提示することで生徒の評価の相対化を図ることなど、試みた。

2) 今後の課題

2017年度・2019年度・今年度と高校1年生の学年団に配置され、うち2017年度と今年度については総合人間科の担当を引き受けた。その経験を踏まえつつ、今年度のコロナの影響を受けてのオンライン授業実施を中心に述べてみたい。

前期分の研究方法の取得については、各技法を学ぶことと実践してみることが両輪である。2017年度に自身が紀要に書いた文章を見直すと「研究方法の習得の講義→ワークによる実践という形をとることがなかなかできなかった。各自宿題という形をとることもあり、提出してチェックする形をとったが、ワークをしているその場での指導ができないこと、教員の指導内容・意図が十分に伝わっていないと感じるところもあり、実時間の必要性を感じさせられた。」と記されている。今年度はオンラインで課題をやりとりする形だったので、内容理解がどこまでできているかを生徒を目の前にして感じるができないもどかしさはあったが、生徒がレクチャーのpdfを何度も読み返しながら、課題にじっくり取り組めたであろうことが想起できる。また課題などに関する質問は、メッセージ機能で対応できたこともよかったと思われる。研究方法の取得は繰り返しが必要なことも考えれば、オンラインでの教材提示・やりとりは、適しているのかもしれない。ハイブリッドでの実施について、考えていくことが課題となろう

後期分のPBLについては、グループ・班で情報を共有、分担していくことが必要である。コロナによる休校が終わったため、班ごとに顔を合わせたの探究活動となった。人間関係が形成されていればオンラインでの情報共有・作業分担も可能だと思われるが、高校1年生は新たに約40名の高校入学者が入ること、コロナ休校期間があり一つの学年として交流が不十分な状況であることを考慮すると、やはりリアルな活動・相談・確認は必須であったと思われる。プレ研究・第一次探究・第二次探究のステップを踏んで深めることを年度当初は計画していたが、授業時間数の確保が難しく、プレ研究の後に小発表を実施し、その後探究・発表・まとめ振り返りの形

で行った。探究活動全般としては、時間が少ないことも作用してか、授業時間やそれ以外の時間を活用しながら、熱心にそれぞれのタスクに取り組んでいた。

SGH型の総人はこれで6年目となるが、過去の実践の積み上げにより、学年会における情報共有・確認もスムーズに行うことができた。SGH型の総人はこの学年が最後となるため、直接的に成果を享受することはできなくなる。実践・経験のエッセンスとなる部分を見出して、次の研究開発にどうつなげていくかが課題となるだろう。

(文責：曾我雄司)